

[発行日]=2000年2月22日

[本文]

夜八時ごろ、陶芸科の教室へ向かった。土で作ったパイプを、軟らかいうちに曲げて、カーブを作るためである。この国では、乾燥がとても早い。うっかりすると、あっという間にカラカラに乾いてしまう。リップ・クリームを絶えず持ち歩き、一日に何遍も唇に塗る。歯を磨くのと同じで、生活の中で必要なことなのだ。

教室は二十四時間使っていていいことになっている。あちこちに外灯があるので、夜中でも問題はない。教室に着くと、ダーヴィッドとクリスチーナが仕事をしていた。

革ジャンパーを脱ぎ、机の上に置こうとしたら、何か小さな物が置いてあるのに気がついた。マッチ箱に入るくらいの大きさの、赤い毛糸で作ったハートである。ふっくらとしている。宝石のような物が、ちりばめられ縫い込んである。毛糸でできた紐(ひも)がついていて、その先に白い四角い布がつながっている。片面にはスウェーデン語、裏面には英語でメッセージが印刷され、二枚の布が縫い合わされた縁取りが美しい。

クリスチーナに訊(たず)ねると、テキスタイルのマリーエからのプレゼントだという。七十五個の毛糸のハートを作り、自分の好きな人たちへ配ったらしい。見ると、あちこちの机の上にも同じような物がある。マリーエと仲良しのクリスチーナの机の上のハートは、とりわけ手が込んで美しい。

メッセージには「あなたのことを想(おも)っている誰(だれ)かから、このハートは届けられました。今度は、あなたが想っている誰かに、このハートを届ける番です」と書かれている。

後でマリーエに、プレゼントありがとうと言うと、そのように好きな人から好きな人へと、めぐりめぐって、私のハートが世界中に散らばってゆけばすてきだという。

マリーエは土曜も日曜も、たいてい何か作っている。テキスタイルの教室ばかりでなく、セラミックやシルバーの部屋でも、何か作っているマリーエをよく見かける。テレビを見ながらでも、毛糸を編んでいる。手を動かしていないマリーエを想像するのは難しい。

私は、街の市場で買ったエクアドルの服を修理してもらった。手を動かすことが好きなので、喜んでやってくれる。今度、土で作った仮面が焼き上がったら、髪の毛のような物を縫いつけてもらう約束をしている。壁に掛け、内側に電気を灯(とも)す仮面なので、壁とのすき間を毛糸の髪の毛が埋める役割をするはずである。

彼女が古いカメラを下取りに出して、新しいカメラと買い替えたときには、カメラのバッグを譲ってもらった。楽器を入れるケースのような、がっしりとした、落ち着いた色合いの革のケースである。バルセロナでも、これを提げていると、プロのカメラマン

と間違われた。とても気に入っている。

さて、ぽっちゃりとした丸顔のマリーエ。黒い髪の人なつっこい人柄。きっと、働き者の気さくな明るいお母さんになるだろう。そんなマリーエの、ふっくらとした温かいハートが、世界中に広がっていきますように！